

# 幼稚園女兒にみられる関係性攻撃の被害者の 行動特徴に関する研究

— 幼稚園での観察を通して —

畠山美穂・磯部美良・越中康治<sup>1</sup>・蔡 佳玲<sup>1</sup>

(2002年9月30日受理)

Loneliness and behavioral characteristics of relationally victimized young girl  
— A naturalistic observation in kindergarten —

Miho Hatakeyama, Miyoshi Isobe, Koji Etchu, and Tsai Chia-Ling

The purpose of this study is to investigate the behavioral characteristics of relationally victimized young children. Four and 5-year-old preschoolers (girl N=18) were observed relationally victim and loneliness in natural setting for one year. In study 1, the child (girl A) who were more relationally victimized and felt more loneliness, and the child (girl B) who were less relationally victimized and felt less loneliness were served as subjects and were examined their behavior characteristics. Result indicated that girl B did more approach to other child than girl A did. In study 2, the acts that girl A did to peer were examined by event sample. As a result withdrawal behaviors were observed in 3 episodes. This result suggested that girl A have anxious by relationally victimized.

Key words: young children, relational aggression, loneliness

キーワード：幼児，関係性攻撃，孤独感

## 問 題

攻撃行動は、子どもの社会的発達に重要な影響を及ぼし、仲間から攻撃される子どもは、後に抑鬱や社会的不適応などの深刻な適応困難を招く恐れがある (Perry, Kusel, & Perry, 1988; Crick, Casas, & Hyon-Chin Ku, 1999)。このように、仲間からの攻撃のターゲットとなることは、社会的問題や精神的健康問題などの望ましくない事態と関連すると考えられる。

攻撃行動は用いられる目的や方法が様々であることから、先行研究では攻撃行動をいくつかのタイプに分類してきた (Crick & Grotpeter, 1995)。相手を直接的に、叩く、蹴る、言語的に脅かす等、あからさまな方法で相手を傷つける攻撃は直接的攻撃と呼ばれる

(Crick & Grotpeter, 1995)。そして、直接的攻撃は道具的攻撃と脅しに分類され、前者は物やテリトリーを獲得する目的で、後者は仲間を支配したり威圧したりする目的で用いられるものと定義される (McNeilly-Choque, Hart, Robinson, Nelson, & Olsen, 1996; Price & Dodge, 1989)。それに対して、「自分の遊びグループから仲間を排斥する」、「仲間がその子どもを嫌うように噂を流す」といった行動で仲間関係にダメージを与える、または仲間関係を絶つことで相手を傷つける攻撃は関係性攻撃と呼ばれる (Crick & Grotpeter, 1995)。

攻撃のタイプと仲間関係との関連について検討した研究は、直接的攻撃や関係性攻撃の被害を受けた児童は、被害を受けていない児童に比べ、仲間から拒否されたり、学校適応に問題を抱えることが多くなるだけでなく、抑鬱、不安、孤独感といった内的な問題も持ちやすいことを報告している (Boulton & Smith, 1994;

<sup>1</sup> 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

Crick & Grotpeter, 1996)。これらの研究は、攻撃被害のそれぞれのタイプが孤独感などの心理的な問題と関連することを明らかにしたという点で意義深い。しかし、攻撃行動のタイプと仲間関係との関連についての研究は、どれも児童期以上の子どもを対象としており、幼児期については研究の対象とされてこなかった。その原因は、一般に幼児期の子どもは孤独感を感じないと考えられてきた (Asher, Parkhurst, Hymel, & Williams, 1990) ためであると考えられる。しかし、Cassidy & Asher (1989) は、幼児と小学校1年生を対象として、ソシオメトリック指名法・評定法、孤独感の自己報告尺度、仲間・教師による社会的行動特徴の評価を行った結果、孤独感は拒否児群が最も高いことが示された。さらに、この研究では、幼児が孤独概念を理解できるか否かについて検討するため、孤独の意味、原因、軽減法について質問している。その結果、93%の子どもが「孤独とは孤立していること」、「悲しみの感情を伴うこと」であると言及し、孤独概念の基本を十分に理解していると結論づけた。

ところで、畠山 (2002) は、攻撃行動のタイプと加害者及び被害者の関係について検討した。その結果、関係性攻撃は、仲間集団内の高地位の女兒が複数で、孤立した特定の女兒に対して繰り返し行うことが示された。従って、関係性攻撃の被害者は、頻繁に多くの仲間から攻撃され、仲間関係が絶たれていると考えられる。

また、畠山 (2000) は、関係性攻撃を頻繁に受けている幼児が、どのような場面でどのような方法により攻撃されているかについて検討したところ、「被害者が加害者の前を通り過ぎたとき、加害者に一方的に悪口を言われる」などの行為がみられることがわかった。

以上の2つの研究から、関係性攻撃は、集団内で高地位に属する女兒が、複数で特定の個人に対して一方的に行っていることがわかる。従って、関係性攻撃の被害者は、多くの仲間との関係性を断たれることで孤立し、孤独感を抱えてしまうことが予測される。

従って、関係性攻撃による被害者は、仲間関係を通して様々な社会的能力を培う重要な時期に、仲間関係を閉ざされ、健全な社会的・認知的発達に深刻なダメージを残す可能性があることが示唆されることから、継続的に関係性攻撃が行われている場合には、保育者の介入や援助が求められる。しかし、関係性攻撃は、無視する、悪口を言うなどの行為であることから、表面化しにくく、保育者が被害者を把握することが難しい。従って、保育者の介入を考えた場合、関係性攻撃の被害者を発見することが重要な問題となるだろう。

児童期の場合、攻撃を受けることで社会的不安や孤

独感が高まり (Olweus, 1978)、日常場面においておどおどとした様子が見られることが示されているため、教師はこうした様子を被害者のサインとして受け止め、具体的な介入を行うことができる (岡林, 1997)。しかし、幼児期の場合、攻撃を受け孤独感が高い子どもに、どのような様子が見られるかについては明らかにされていないことから、被害者を特定する手がかりが不明である。従って、幼児の関係性攻撃の被害者が日常的に仲間とどう関わるか、また、どのように振舞うのかについて明らかにすることは重要なことである。

また、児童期以降の攻撃は、加害者の「うさばらし」など、不意打ち的に理由もなく行われるのに対し、幼児の場合、被害者が「不適切な方法で働きかける」などの理由で攻撃される場合があることが示された (畠山, 印刷中)。従って、攻撃の被害者がどのようなスキルに不足しているのかについての具体的な検討が必要であろう。

そこで、本研究では、関係性攻撃を受け孤独感の高い幼児に、仲間との相互作用場面において、どのような行動特徴がみられるかについて検討することを目的とする。関係性攻撃を受け孤独感の高い幼児は、仲間関係が閉ざされ、仲間との相互作用が少ないなど、様々な問題を抱えていることが予測される。従って、非被害者で孤独感を抱えていない幼児と比較して、仲間関係や仲間との相互作用においてどのような違いが見られるかについて検討する。さらに、関係性攻撃を受け、孤独感の高い幼児が、仲間とどのように接しているかを質的に分析することで、被害者が抱える不安や被害者の社会的スキルについても検討を加える。

以上のことから研究1では、関係性攻撃を受けることが多く孤独感の高い幼児が、関係性攻撃を受けることが少なく孤独感の低い幼児と比べて、社会的行動や仲間関係にどのような違いが見られるのかについて量的な検討を行う。また、研究2では、関係性攻撃を受けることが多く孤独感が高い幼児の、相互作用場面におけるエピソードについて質的な検討を行う。

## 研究1：関係性攻撃の被害を受け孤独感が高い幼児と関係性攻撃の被害を受けず孤独感が低い幼児の行動の比較

### 方法

#### 観察対象者抽出

##### 1. 攻撃被害の測定

材料：関係性攻撃被害に関する教師評定尺度3項目

対象：幼稚園年長児の担任教師1名

幼稚園年長女兒13名

手続き：幼稚園教諭に、担当クラスの女兒の関係性攻

撃被害について5件法で尋ねた。従って、攻撃被害得点は、3点～15点の範囲である。

## 2. 孤独感の査定

材料：前田（1995）が作成した孤独感尺度11項目

対象児：幼稚園年長女児13名

手続き：幼児に幼稚園での孤独感について3件法で尋ねた。従って、孤独感得点は、11点～33点の範囲である。

観察対象児：以上の2つの尺度の結果から、関係性攻撃の被害が高く孤独感が高いA児と（関係性攻撃被害得点：11，孤独感得点：30）、関係性攻撃の被害が低く孤独感も低いB児（関係性攻撃被害得点：4，孤独感得点：15）の2名を観察対象児として選択した。

## 3. 仲間関係の査定

本研究では、仲間関係を査定するため、仲間内肯定的指名を用いることとした。しかし、仲間内指名は、倫理的な問題により実施が困難であることから、本研究では、卒園文集と担任教師に対するインタビューにより情報を得た。卒園文集は、3月に「お友だちとの楽しい思い出を書くように」と言われて幼児1人ひとりが作成したものである。その文集には、仲良しのお友だちの名前と絵が書かれており、担任教師と相談の上、それぞれの幼児が文集に載せている仲間を肯定的指名があるものとみなした。そして、その肯定的指名における相互的指名をもとにソシオグラムを作成した（Figure 1）。また、担任教師により、A児に対する関係性攻撃は、主にBやFの属するグループに見られると報告された。

Table 1. 関係性攻撃被害得点と孤独感得点の平均及びSD

	平均	SD
関係性攻撃被害	5.3	2.6
孤独感	16.9	4.2

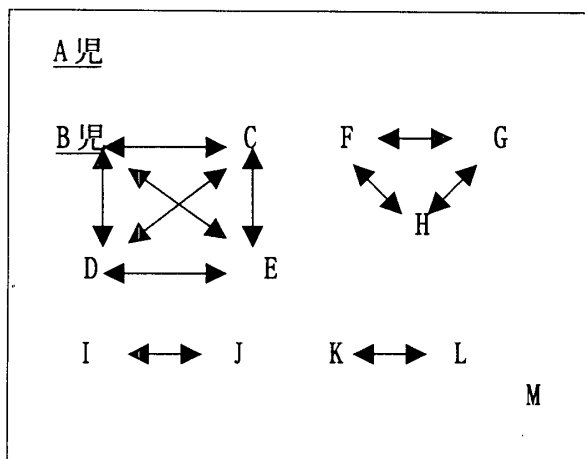


Figure 1. 観察対象クラスのソシオグラム

注) 矢印は、相互的指名

## 観察方法

観察は、観察者4名で、2001年5月～2002年3月までの約9ヶ月間（7月は除く）、A児とB児の自由遊びの様子をビデオ録画した。観察時間は1人、5分×2回の10分間であった。

## 記録方法

観察された行動は、The Behavior Observation Record (BOR) (Karen, Alice, & Charles, 2000) を用いて記録した。BORは、就学前児の遊びや社会的行動の記録のために開発された観察記録法であり、ターゲット児が従事している行動だけでなく、ターゲット児の行動に対する他児の反応についても同時に記録することができる。また、BORでは、従来評定されてこなかった相互作用の質的側面も評定することが可能である。例えば、行動に伴う感情の質を示すために、明らかにポジティブな表情をした場合（例えば、笑うなど）はプラス（+）、ネガティブな表情（例えば、泣く・怒る）にはマイナス（-）、ニュートラルな表情を示した場合にはゼロ（0）を記録する。

従って、本研究では、BORで設定された行動カテゴリーに存在する行動がみられた場合、その頻度ごとに以上の手続きで記録するという事象見本法を用いた。

## 結果・考察

### 1. 関係性攻撃の被害と仲間関係及び孤独感の相関分析

関係性攻撃と孤独感及び、相互的友人の数のそれぞれについて相関分析を行った。その結果、関係性攻撃と孤独感 ( $r = .70, p < .05$ ) に有意な正の相関が見られ、関係性攻撃を受けている子どもは、孤独感が高いことが示された。また、関係性攻撃と相互指名の数 ( $r = .48, p < .10$ ) に正の相関（有意傾向）が見られた。しかし、関係性攻撃と相互的友人の数で得られた相関値は中程度であり、相互的な友だちがいない子ども全てが関係性攻撃を受けているわけではないことを示している。

また、相互指名数と孤独感との間には有意な相関は見られなかった。従って、友人の多さと孤独感との間に関連が見られないことが示された。Coie & Dodge (1983) は、クラス内に少なくとも1人でも友人がいることが情緒的サポートの重要な源泉となり、孤独感を経験しないことが示されている。従って、単純に友人の数が多からといって孤独感が低いとは限らず、友人数が少なくても情緒的なサポートが受けられれば孤独感を経験しないということが示唆された。

また、A児はソシオグラムにも示されるように、仲

間関係において孤立した状態にあり、情緒的なサポートを受けられる仲間がいないことが予測されることから、孤独感が高かったと考えられる。

## 2. 観察対象児の行動特徴の比較

Table 2はBORを用いてA児とB児の行動を観察した結果である。まず、A児とB児が従事した遊びの種類とそれに費やした時間について述べる。A児は、ごっこ遊びなど協調遊びに従事した時間を測定したところ、6分30秒であり、B児が9分30秒であった。従って、A児はB児よりも仲間との相互作用時間が少ないことがわかる。Rubinやその共同研究者たちは(Rubin & Borvick, 1984など)、就学前児、幼稚園児、1年生の、自由遊び時間を6週間にわたって時間見本法により観察した。そして、その子どもが2年生になったとき、4年生になったときに、同様の方法で観察を行った。その結果、就学前から2年生にかけて、孤立している子どもが仲間と関係をもつ時間は全体のわずか12%に過ぎないことを示している。そこで、本研究の結果をみると、A児は全体の約6割を仲間との相互作用に費やしていることから、先行研究の結果と比較してみても、A児の仲間との相互作用が少ないとは言いきれないと考えられる。

そこで、相互作用の内容について検討したところ、Table 2に示すように、A児はB児と比較して、仲間との遊びの間、他者に対するアプローチが少ないことがわかる。さらに、他者からのアプローチに対して、ネガティブな反応で応答する場合もあり、B児と比較して他者からのアプローチに対してポジティブな感情(+)で対応することが少ないことがわかる。つまり、A児は、ある程度仲間との遊びには加わっているものの、その遊び場面においては、A児からの仲間に対する積極的な働きかけが少なく(9回)、仲間からの働きかけに対してもネガティブな感情(-)で対応する場面がある(3回)ことが示された。

### 研究2：関係性攻撃を受け孤独感が高い幼児の行動特徴についてのエピソード記述

研究2の目的は、関係性攻撃を受け孤独感の高い幼

児(A児)が仲間とどのような相互作用を行うのかについて、A児が仲間との相互作用を行った際のエピソードをもとに検討することである。

また、観察は、好きな仲間とグループを作る場面として昼食時間とした。なぜなら、自由に仲間とグループを作る場面は、仲間関係が顕著に現れ易く、また、日常仲間との接触が少ないと予測される対象児が、仲間との相互作用を行う機会であると考えたためである。

#### お弁当の時間について

お弁当の時間が始まる前、クラスの全員が椅子を持ち、保育室内に集まってくる。F幼稚園では、お昼はお弁当を持参し、それぞれのクラスごとに、保育室内・外で食事をとることになっている。

観察対象クラスは、グループ(5~6名)を作り、それぞれのグループで1つの机を使用し、食事をする場合が多い。また、座るメンバーや机は幼児が自由に選択できることから、仲の良い幼児同士がグループを作って着席する。

そして、自然発生的に出来上がった5~6名のグループは、ほぼ男児のグループが2班、女児のグループが2班、男女混合のグループが1班になることが多い。班のメンバーの傾向として、男女それぞれの4つのグループは特定の仲良しグループからなり、男女混合グループの1班は、その中に入れなかった子どもが着席する。

#### 観察方法

観察は、観察者4名で、2001年5月~2002年3月までの約9ヶ月間(7月は除く)、幼稚園の昼食時間におけるA児の様子をビデオを用いて録画した。

#### 記録方法

エピソードの記録方法は、お弁当の座席獲得場面で見られたA児と他児との相互作用場面を、その前後の文脈を含めて詳細に記述した。また、単に言語的相互作用場面だけでなく、A児が仲間に近づく・傍観するといった行動が見られた場合にもエピソードとして取り上げた。

Table 2. A児とB児の行動の生起頻度の比較

	A児			B児		
	+	-	0	+	-	0
1人	0	1	5	0	0	0
他者に対するアプローチ	9	0	0	18	2	0
他者からのアプローチ	1	3	1	5	0	0
わからない	0	1	12	13	0	11

### A児とF児・G児との関係

F児とG児は、Figure 1に示されるように、相互指名があり、幼稚園での多くの時間を共に過ごしている。また、A児は、肯定的指名において、F児とG児を指名しているが、F児とG児からの指名はない。さらに、F児とG児の行動に追従する場面が多く見られることから、2人の仲間に入りたいと考えていることが伺われる。しかし、F児とG児は、A児のことなど眼中にないといった様子で、F児とG児の2人、もしくは、F児、G児、H児の3人で仲良く遊ぶ様子が見受けられる。F児とG児の関係は、遊びを決めるなどの決定権はF児にあり、F児が主張し、G児がそれを受け止めるという関係である。

A児のF児とG児との関わりについて3つのエピソードから考察する。

## 結果・考察

### エピソード1

お弁当の時間になって、皆が椅子を持って保育室内に集まり、グループを作って着席し始めた。A児は椅子を持ったまま、席を探しながらゆっくりと歩いている。そして、女児数名が集まってグループを作っている近くで足を止め、その様子をじっと眺めている①。そのとき、F児がそのグループの席に着席する。すると、F児の近くのあいている席をめがけて、急いで椅子をもって駆けつける②が、他の女児に先を越されてしまい、残念そうな表情をする。その後しばらく、F児の座っているグループの周りをうろうろと無言のまま歩き回る③が、結局そのグループに着席することはできず、あきらめたように男女混合グループの席につく。

エピソード1は、座席獲得の際のA児の様子を示したものである。下線部①②③から、A児が積極的に言語的な方法を使って仲間入りを行うのではなく、傍観や非言語的なアプローチにより仲間入りを試みていることがわかる。また、②からわかるように、F児の座っているグループに入りたいという願望があると考えられる。

このように、A児は、仲間と関わりたいという思いを、仲間に対して言語的に主張するのではなく、あきらめて他の場所へ移動するといった、自己抑制的な行動をとることがわかる。

### エピソード2

お弁当を食べる席を決める時、A児は、B児のグループに近づき後ろの方で立って傍観している。すると、そのグループの中のC児が、A児と一緒に座るように声をかける。しかし、何も言わずその場を離れ、「Gちゃん」と言ってG児を探しながら保育室の外へ出て行ってしまふ④。しばらくしてA児は、保健室へ行っていたF児とG児の後について保育室に戻ってくる。そして、B児のグループの班に入れてもらおうとするが、場所が狭いため3人一緒に入ることが出来ない。すると、A児は、「FちゃんとGちゃん、2人で座っていいよ」としょんぼりしながら言う⑤。

エピソード2は、座席獲得の際に、F児、G児以外の仲間から一緒に座るように誘われるものの、それには応答せず、彼女らを探しに行くという場面である(下線部④)。ここからわかるように、A児はF児とG児以外の仲間とは一緒に座りたくないということを示唆するものである。

また、下線部⑤に示すように、3人が共に座れないことがわかると、F児とG児に2人で座るように促している。このことから、F児とG児に対してA児が自己抑制的な行動をとっていることが伺われる。

### エピソード3

この日は、外で昼食をとることになった。お弁当の準備をして外に向う時、A児はF児に「今日、私も(F児とG児の2人と一緒にお昼を)食べていい？」と不安気におどおどした様子で聞く⑥。すると、F児は少し嫌そうな顔をしながら「いいよ」と言う。

エピソード3は、A児がF児、G児とともに昼食をとるために、F児に言語的な方法を用いて働きかける場面である。しかし、その様子は不安気でおどおどしたものであり、こうしたA児の不安気な様子は、他の観察場面でもよくみられた。岡林(1997)は、児童期の攻撃の被害者となっている子どもには、おどおどとした行動が見られることを報告している。仲間からいじめを受ける子どもは、心配性で自尊心が低く、社会的不安を示す(Olweus, 1978)ことから、このような行動が生起すると考えられる。従って、A児のこうした行動は、関係性攻撃の被害得点が高いという研究1での教師評定の結果を裏付けるものであり、A児が対人関係において心配や不安を抱えていると考えられる。

エピソード1～3の記述から、A児の自己抑制的な行動やおどおどとした様子が描写された。おどおどとした行動や自発的に仲間との遊びに入ることができずにいる行動は引っ込み思案行動と定義されている(坂野, 1989)。引っ込み思案行動には、社会的スキル欠如型、不安型、自発型、の3つのタイプがあり、中でも不安型の引っ込み思案は、対人関係に対する強い不安により適切な社会的行動の表出が妨害され、その結果、個人の反応や行動がぎこちなく抑制的で、集団場面で後退的になると述べている。

従って、エピソード1～3のA児の行動から、仲間から関係性攻撃を受けることで孤独感を抱き、対人関係に対して強い不安を抱いていることが示唆される。

## 総合考察

本研究では、関係性攻撃を受けることが多く孤独感の高い幼児が、仲間との相互作用場面において、どのような行動特徴を示すのかについて検討することを目的とした。研究1では、関係性攻撃を受けることが多く孤独感の高い幼児が、関係性攻撃を受けることが少なく孤独感の低い幼児と比べて、行動特徴や仲間関係にどのような違いが見られるのかについて量的に検討した。その結果、仲間から関係性攻撃を受けることが多く孤独感が高いA児は、関係性攻撃を受けることが少なく孤独感も低いB児と比較して、仲間との遊びが少なく、1人で行動することが多いことがわかった。ただし、観察時間の半分以上(65%)は仲間との遊びに従事していることが示された。

そこで、仲間との遊びにおける相互作用の内容を見てみると、A児はB児よりも他者に対するアプローチが少なく、他者からのアプローチは同頻度みられるものの、そのアプローチに対して、ネガティブな反応で応答する場合があります。ポジティブな感情で仲間と対応することが少ないことがわかった。また、仲間内肯定的指名の結果から、A児は仲間の中で孤立した状態にあることがわかった。

以上の結果から、A児は、仲間との相互作用はある程度みられるものの、仲間から関係性攻撃を受け、孤独感を抱え、仲間との協同で遊ぶ場面においても働きかけが少なく、相手に対してネガティブな表情で接する場面があることがわかる。こうした、仲間に対するネガティブな感情を表出しながらの対応が、仲間からの関係性攻撃を誘発する原因となっているのかもしれない。

次に、研究2では、関係性攻撃を受けることが多く孤独感の高い幼児の、相互作用場面におけるエピソード

について質的な検討を行った。その結果、昼食時にグループを作る際、仲間に対して積極的な働きかけができず、自己抑制的な行動やおどおどとした様子が観察された。こうしたおどおどとした自己制御的な行動は、攻撃されることで生じた対人関係に対する不安が原因であることが示唆された。

また、こうした行動は、攻撃の被害を受ける児童に多く見られる行動であり、教師が被害者を見極める際のサインとして捉えられている(岡林, 1997)。従って、幼児の関係性攻撃の被害者にもこうしたおどおどとした自己制御的な行動が見られたことから、これらの行動を幼児の攻撃の被害者を見極めるサインの1つとして考えることができるだろう。

以上の本研究の結果は、幼児期の女兒にみられる事例についてのものであることから、幼児期全般における傾向として捉えることはできない。従って、今後、さらに多くの対象を用いて幼児期の攻撃の被害者について検討する必要がある。また、本研究では、関係性攻撃、孤独感、仲間内地位、行動特徴の因果関係までは明らかにすることができなかった。今後、これらの因果関係についても明らかにする必要があるだろう。

## 【引用文献】

- Asher, S. R., Parkhurst, J. T., Hymel, S., & Williams, G. A. 1990 Peer rejection and Loneliness in childhood. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood* (pp.253-273). New York: Cambridge University Press.
- Boulton, M., & Smith, P. 1994 Bully/victim problems in middle school children. Stability, self-perceived competence, peer perceptions, and peer acceptance. *British Journal of Developmental Psychology*, *12*, 315-319.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. 1989 Young children's conceptions of loneliness. Manuscript in preparation.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1983 Continuities and changes in children's social status: A five-year longitudinal study. *Merrill-Palmer Quarterly*, *29*, 261-281.
- Crick, N. R., Casas, J. F., & Hyon-Chin Ku. 1999 Relational and physical forms of peer victimization in preschool. *Developmental Psychology*, *35*, 376-385.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, *66*, 710-722.

- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. 1996 Children's treatment by peers: Victims of relational and overt aggression, *Development and Psychopathology*, 8, 367-380.
- 畠山 美穂. 2000 幼児の攻撃行動のタイプに関する研究：自然観察法から 広島大学教育学部紀要, 49, 417-424.
- 畠山 美穂. 2002 自由遊び場面における幼児の攻撃行動の観察研究：攻撃のタイプと性・仲間グループ内地位との関連 発達心理学研究, 3, 252-260.
- 畠山 美穂. (印刷中) 幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態 発達心理学研究.
- Karen G. W., Alice S., & Charles, S. 2000 Play diagnosis and assessment (pp.544-562). John Wiley & Sons, Inc. New York: Wiley.
- 前田 健一. 1995 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性, 引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.
- Mcneilly-Choque, M. K., Hart, C., Nelson, L., & Olsen. 1996 Overt and relational aggression on the playground: Correspondence among different informants. *Journal of Research in Childhood Education*, 11, 47-67.
- 岡林 美枝. 1997 いじめのサインとチェックリスト, 学校教育相談の理論・実践事例集. いじめの解明, III-3-(2). 第一法規出版株式会社.
- Olweus, D. 1978 Aggression in the schools: Bullies and whipping boys. Washington, DC: Hemisphere.
- Perry, D. G., Kusel, S. J. & Perry, L. C. 1988 Victims of peer aggression. *Developmental Psychology*, 24, 6, 807-814.
- Price, J. M., & Dodge, K. A. 1989 Reactive and proactive aggression in childhood: Relations to peer status and social context dimensions. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 17, 455-471.
- Rubin, K. H., & Borwick, D. 1984 The communication skills of children who vary with regard to sociability. In H. Sypher & J. Applegate (Eds.), Social cognition and communication. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 坂野 雄二. 1989 無気力・引っ込み思案・緘黙 (p.15). 黎明書房.

(主任指導教官 山崎 晃)